



〒244-0002 横浜市戸塚区矢部町1 2 5

電話 045-881-0348 FAX 045-392-6043

E-mail: mail@zenryouji.jp http://www.zenryouji.jp

発行責任 善了寺 還る家とともに 3月担当：溝口

## 春ですが…

立春も過ぎ、暦の上では春を迎えています。2月に入ってすぐには4月上旬並みの暖かい日もありました。ところが…。2月8日には、関東地方ではおよそ二十年ぶりの大雪となり、横浜市ではおよそ16cmの積雪がありました。その翌週の2月14日には約18cmの積雪があり、各地では交通機関の麻痺や転倒事故など混乱状態となりました。



雪の予報に対し、還る家ともにでは営業を断念し、利用者・ボランティアの皆様には休んでいただく事となり、大変ご迷惑をおかけしました。また、その後も足もとの悪い中、デイサービスへ沢山の方に足を運んで頂く事が出来、大変感謝いたしております。

2月8日の前日…わたし(溝口)は娘(3歳)から風邪をもらい、妻にも伝染り、お休みをいただき自宅で、家族そろって養生しておりました。(皆さんにはご心配をおかけしました。)そうこうしていると、どうも天気予報では明日は雪になるらしい…とっていると、案の定雪が…。8日の午後には娘の熱も下がりました。娘は雪を見て大興奮していたので、窓を開けて降る雪を見せていましたが、ずっと室内にいた事もあり、外へ出たがっていました。翌9日の、日が差しの暖かくなった時間帯に寒くないようにして外に行くと、今までの体調不良がウソのように元気よく雪で遊んでいました(左の写真)。風邪をぶり返すとまずいので、頃合いを見て家へ帰ろうとすると、まだ遊んでいたくて駄々をこねて「ウーン、いやだー！」と泣いていました。

娘を見ていて、自分も小さい頃雪が降るとワクワクして、友達と雪だるまを作ったり、雪合戦したりして遊んだ事を思い出しました。それが“あしたはどうやって仕事に行こう”“電車うごいてるかなあ…”と心配するようになり、こんな私でもいつの間にか大人になったんだな…と実感しました。さらに、雪かきをしたり、出勤の時に家から駅へ歩いた影響で数日後に筋肉痛がやってきて、これが歳を重ねるとい事なんだな…と今更ながら気付いた今日この頃でした。

## 介護観=「介」五感？ 三根 周

所長という立場になってみると、時にスタッフをはじめとして色々な方に伝え・示していかなければならない事もあると思いますが、逆にそこから離れていくべきではないか等、頭の中で葛藤している今日この頃です。妻からだけでなくスタッフからも「言わなきゃ分からないよ」と諭されたり、同時に「段々所長の色が出てきた」とも言われた事もあります。結局ボクは何をやりたいのか、キチンと示した事もなかったのでこの場を借りて考察してみたいと思います。

恥ずかしながら自分は「介護は●●●だ!」と言えるほどのハッキリ・シッカリとした考えは持ち合わせていません。介護の文脈で表わすのが難しいのですが、現代音楽の作曲家ジョン・ケージの「4分33秒」や映画「カッコウの巣の上で」みたいにありたいという思いはずっとあります。

ジョン・ケージの「4分33秒」とはピアノの前で4分と33秒の間何も演奏せず、そこにある静寂(鳥のなき声や人の話し声等)が作品になっています。5線譜から音を開放し、あるがままを受け入れ、そこにある偶然性に着目したその名(迷?)曲は当時大学生で悶々と過ごしていた僕にはとても刺激的でした。

映画「カッコウの巣の上で」(アカデミー賞受賞作品)は、ジャック・ニコルソン演じる主人公が精神異常を装って刑務所での強制労働から逃れ精神病院に入り、そこで患者の人間性までを統制しようとする病院から自由を勝ちとろうと試みる物語です。そこにある患者の目のキラキラ感は、主体性の尊重や快・不快の原則を基本とする介護現場においても追い求めなければならない大切な事だと思えます。

これがボクの介護観なのですが、これでは抽象的なので今までの経験も含め特別養護老人ホームでの具体的な話を。(事項へ続きます:もう少々お付き合いください)

98歳のフミさん(仮)は時折血圧が200を超える時もあります。花が大好きで特に好きな藤の花を見たいと話されるフミさん。何とかその想いに沿いたいと、血圧の現状から体調が急変することも前提としながらも、家族にフミさんとボクたちの想いを伝え、結果家族も一緒に車で片道1時間半かけて足利フラワーパークへ。到着時血圧測定もやはり200超え。でも、本人的に自覚症状もなく、園内では家族水入らずで楽しいひと時を過ごされていました。また、別の機会には何度かお墓参りにも行きました。墓地の通路は狭いので職員2人掛かりで車椅子を抱えてお参りました。フミさんは車椅子の生活になってからはもうお墓参りは難しいと諦めていましたが、数年ぶりにお参りが出来た事をとて喜んでくれていました。

88歳のヨシオさん(仮)は某大手会社の元重役。パーキンソン病の進行に伴い幻覚幻聴など認知症状が深くなってきました。落ち着かなくなると、「取引先に挨拶に行くから一万円の菓子折を準備しろ」と話されることもしばしば。そうすると、そこからは行く宛のない旅路のようなもので、車で本人が納得するまでドライブ。大体はヨシオさんの好きなリンガーハットを食べると落ち着かれ、そこを落とし所としていました。

他にもいろいろと個別的な関わりをしてきました。入居者が輝けるように、老人ホームという施設から抜け出そうと試みました。しかし、裁量はこちら側にあって、それをするのもしないのも自分次第。自分がいるのは体制側というか、「カッコウの巣の上で」で言えば管理的な精神病院の職員の立ち位置だ、という思い・シレンマは拭えませんでした。と同時に、職員に対しては管理的で、お年寄りの尊厳のために、と排泄や入浴・食事環境の改善も図り「～してはならない・～しなければならぬ」と決まり事をたくさん設けてきました。

で、今ボクは「還る家ととも」においてまさに施設管理職という立場にいます。ですが、今までの様なシレンマは感じていません。それは、ボクは管理職という立場にありながらも(反原発・脱原発ならぬ)反管理・脱管理的な関わりが出来る関係や環境があるからではないかと考えています。なぜそうなれるのか。それは先月のニュースに記したように『還る家ととも』はボランティアの皆さまをはじめとして多くの方々を支えてもらっています。その中で小さいデイサービスながらも、介護する人・される人といった限定された一方的な人間関係ではなく、ボランティアの皆さまを中心とした多様な人間関係の中で沢山の交流が生まれ、そこからそれぞれの主体性を自然な形でみなさま自身が発揮できる機会が多いからではないか、と考えます。

その主体性はご利用者だけでなく時に職員にも当てはまってきます。ボクはよく「変わっている」とか「個性的」など言われる事が多いのですが、自分に限らず「還る家ととも」の職員はみんな個性的です。ご利用者や職員の個性を狭義の枠で縛りつけ主体性を殺すのではなく、それを受け入れる、排除しない・されない安心感こそがボクの求めるものであります。

「新しい介護」の礎・三好春樹さんは『介護の「介」は介入の「介」ではなく媒介の「介」だ』と仰います。直接的な介護ではなくても媒介になって、感性に沿って「介」五感を大切にしていきたいと思えます。

とはいっても、安心・安全の下地があってこそそのデイサービスです。締める所はしっかり締めて、これからも皆さんと楽しく過ごしていきたいと思えます、いつもありがとうございます。 三根 周

## ボランティアさん

善了寺に関わってくださっている沢山の皆さまにデイサービスは日々支えられています。いつもあたたかい気持ちと笑顔を持ちよって寄り添って下さることにあらためて感謝申し上げます。

中嶋芳江	秦野かねよ	安藤信子
竹中秀子	山下トキエ	西岡美都里
寺島美代	朝倉好子	別府与志子
濱崎芳子	市野和歌子	弓削福子
矢口和子	秦野雅子	飯島慶子
米村正男	小寺久枝	江田峯子
中島雄子	村井ヒテ子	江尻伸子
鳥巢スエ子	牛島寛子	橋本淑子
長澤チヨ子	福寿貴美恵	犬塚照夫
松村節子	秦野宣子	大金スエ子
梅本忠男	小林ミエ	林ヨシ子
松田良子	森谷ミヨシ	山田ヒロ子
増村隆	穴山よしお	乾隆子
磯地正人	内田佐知子	砂川元枝
長岡綾子		

## 編集後記

オムツ外し学会 INよこはまに参加しました。その中で、富山のデイサービスふらっとの宮袋季美さんの講演を聞きました。宮袋さんは、福祉の専門家ではなく、重度の障がいのあるお子さんを持つお母さん。「専門家は雇えば良い」と言われ『障がい者のために福祉施設を作ってあげたい』という善なる気持ちで立ち上げたのではなく、障がいがある子どもをかかえて生きていて、沢山の差別や不自由さや生きにくさを経験された『親としての怒り』が原動力となり、行政と渡り合い自然発生的に立ち上げるようになったとか。障がい者を妹に持つ私も「なぜ、妹は道を歩くだけでジロジロ見られなければならないのか？なぜ、普通の小学校に入学させてもらえなかったのか？なぜ、町中段差だらけなのか？なぜ、妹が障がい者だと言っていじめられるのか？」など、社会に対する怒りを子供の頃から持ち続けています。でも、私のは、恨みにも似た『ただの怒り』。怒りから社会を恨んでも何も生まれないし、だれも幸せにはならない。『怒りを原動力にする』って、なんと平和的な行動だろうと尊敬しました。